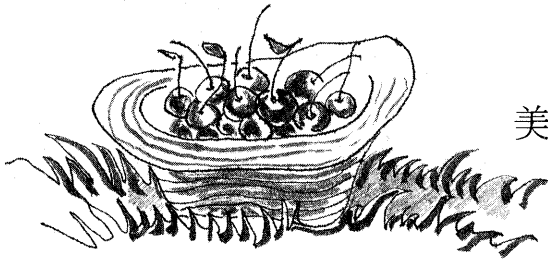


桜んぼの村

グレッヒエンベルクを訪ねて



子 いく島 谷 美

グレッヒエンベルクへ

桜んぼの熟す頃になると、私は、グレッヒエンベルクという桜んぼの大木に囲まれた、小さな村のことを思い出す。私が、二人の娘と共に、グレッヒエンベルクを訪ねたのは、一九八六年六月下旬のことであった。

グレッヒエンベルクは、西ドイツ南部のバイエルン州ニュールンベルクから、北へ車で一時間に位置する、チエコスロバキアに近い、山の中の村である。普通の地図には載っておらず、ドイツ人でさえ知らない程の片田舎で、村人は純朴で親切であった。

緑に囲まれた風景の美しい所で、「フランケン地方のスイス」と呼ばれ、ニュールンベルクに生まれた、アルブレヒト・デューラーが、この近くの景色を、よく描きに訪れたという。泊った宿からの眺めは、野原と森が地平線まで続き、時々、鹿が近くまで遊びにくる。

北方にはチュービンゲンの森、東方にはポヘミアの森を控え、冬が長く雪に閉ざされ、材木に恵まれたこの地方一帯に、木彫りの人形 (Docke) 作りが、農民の炉端

の手仕事として盛んになり、「ニュールンベルクの人形」として世界中に有名となった。

グレッツヒェンベルクには、大学のドイツ語教官として来日し、松本に三年間滞在され、共に子育ての時を過ごした、シュミット一家が住んでいる。

この時、私達一家は、三年半ぶりに西ドイツヘッセン州グリム兄弟縁の大学街、マールブルクに滞在していた。

六月二十二日朝、七時四十五分に家を出て、マールブルク駅まで主人に送ってもらう。フランクフルト発十時二十一分のI.Cインターシタイに乗る。長女Kは、ハーナウを過ぎた頃には、朝が早かったので眠ってしまう。車窓より、マイン河の水面が初夏の太陽に輝いて見える。四年前、私と娘Kは、グリム兄弟の生まれ故郷ハーナウを訪れ、

ハーナウ城のカンナが咲き乱れる庭からこの河を眺めた。帰国後、すぐにシュミット一家との出会い。次女Mの誕生で子育てで忙しい合い間に、グリム童話やトリスタンとイゾルデ等をシュミット夫人と一緒に読んだ三年

間。そして今、私は二人の娘と共に、シュミット一家を訪ねる旅の車中にある。私は人との出会いの不思議さに思いを巡らせ、四年前と変わらずゆったりと流れるマイン河を見つめていた。

十二時五十八分、ニュールンベルク着。ホームまでシュミット夫人と次女ニーナ（七歳）が出迎えてくれる。昨夏、別れてから十か月ぶりの再会である。駅の外の車に、シュミット氏と、長女アメリー（八歳）と長男トビアス（三歳）が待っていてくれた。懐しいニュールンベルクの旧市街（マルクト広場、マリーエン教会、玩具博物館、デューラーハウス）を見て、グレッツヒェンベルクへ向かった。車道には、桜んぼを売る露店が時々見られた。

桜んぼ

十四時五十分、シュミット家に着く。家のすぐ前に、桜んぼの大木が何本もあり、赤い実が熟れている。

子どもの背丈位までたわわに垂れ下がっている。子ども

達は、お茶が終わるとすぐに、桜んぼの木へ走り去った。袋を一杯にしては、耳にイヤリングのように桜んぼを下げて戻っては来たが、又すぐに桜んぼの木の下行き、夕食まで帰らなかった。

「桜んぼさん、あなたは、どうしてそんなに赤くおいしそうな顔をしているのっ：おいしそうな匂いと、赤い頬っで、口がもずもずしているわっ：」

(Kの桜んぼに対する語りかけ、六歳の時を思い出して書いた文から)

夏至に近いこの季節は、冬の長い北国ドイツの人々にとっては、待ち遠しかった煌々ような季節。日本のように梅雨はないので、青く澄み切った空のもと、森から吹いてくる初夏の爽やかな風が、麦畑や牧草地や桜んぼの梢を渡り、麦を実らせ、牧草を伸ばし、桜んぼを熟れさせる。

一八四七年発刊のカール・ティーネマンの筆による、子どもの為の絵と格言のカレンダー「一年と一日」(註)の六月は「千草づくり」、七月は「桜んぼもぎ」

である。

「桜んぼもぎ」

さあ みんな見て！

私は庭の桜んぼの木

緑の葉っぱの間に見えるのは

真っ赤に熟れた桜んぼ！

登ってお取り！

だけどズボンを破いちゃだめよ

つまみ食いもほどほどに

でないとお母さんにしかられるから

グレッツヒェンベルクは、南なので暖かく、六月下旬に桜んぼが熟しているが、西ドイツ中央に位置するマールブルクは、ここより北で寒いので、市場ブルクに走りのものを見かけたが、木に生っているのはまだ青かったから、熟れるのは七月になるだろう。

ドイツの桜んぼは、日本のものより実が大きく甘い生

食用と、保存用として加工する酸っぱい桜んぼ (Sauer Kirsche) がある。後者は、ママラーデ、桜んぼ酒、桜んぼジュース、お菓子に使う罐詰にされる。桜んぼもぎは子どもにとって楽しい年中行事であり、働きの者のドイツの主婦は、一年分の食卓を初夏の煌きで彩る桜んぼの保存食作りに、忙しい時を過ごす。南ドイツ地方に古くから伝わるココア入りの台生地の中に、サワー

・キルシュと生クリームをはさみ、上に砂糖漬けの桜んぼを飾ったシュヴァルツヴァルデ地方の桜んぼトルテは絶品である。シュヴァルツヴァルデ地方の女性の民族衣装の帽子には、赤く大きい桜んぼがあしらわれている。

桜んぼの梢を渡ってくる心地よい風を受ける前庭で、ニールンベルク名物ブラート・ブルストや、豚肉のビール焼きが香ばしく焼けるにおい。シュミット氏がワインの栓を抜く。いつまでも暮れない初夏の夕べ、シュミット夫人手作りの晚餐がゆっくり始まる。

グレッツヒェンベルク幼稚園

六月二十三日、快晴。八時に宿で、典型的なドイツの朝食(焼きたてのブロートヒェン、フォルコーンブロート、チーズ、ハムが何種類か、さめないよう鶏の形に編

◀桜んぼが、たわわに熟れている園庭で



んだカバーがかけられているゆで卵、コーヒー、子どもは(コア)をとり、シュミット家へ行く。Kは、昨日の桜んぼ取りが気に入ったとみえ、ニーナと、すぐに桜んぼ取りに行ってしまう。九時に、シュミット夫人と、彼女の子どもを送りながら、二人の娘を連れて、徒歩で五分程にあるグレッヒエンベルク幼稚園を訪ねる。

グレッヒエンベルク幼稚園は、教会付属で、級は、縦割三〜六歳児混合の三クラス、園長一名、教師三名で、自由保育をしている。園庭には木が多く、桜んぼの大木が何本もあり、桜んぼが赤くたわわに実っている。広い芝生の庭には、丸太で作られた遊具や長椅子がゆったりと置かれている。

子どもは、お祈りの時間で、講堂に主任の先生を中心に丸く輪になって椅子にかけていた。中央には白い蠟燭が一本置かれている。火を灯したい子どもに挙手させ、マッチで火を付けさせ、お祈りを始める。

次に、この日新入園児が三名あり、その紹介をする。この中にトルコからの移民の子どもも一人いた。日本の



▲ 蠟燭を囲んで、これからお祈り

ように、四月一斉に入園式をして入園というのではなく、各々が三歳の誕生日を迎えた時に入園するのである。入園にしても、服装にしても、自由で個人に任せられてお

り、画一的に一齐にするということはない。

この園でも外国からの移民に対する細かい配慮が見られる。最近では、ドイツ人失業者が増加しているので、移民であるトルコ人とのトラブルが多いと聞いた。しかし、これから国を担う子どもが、人生のはじめの時期に、幼稚園で差別なく、異質の文化を持った子どもと遊び係わることを体験していることに、西ドイツという国の良識を見ると同時に、将来に大きな希望を抱かせる。

先生は、私達の紹介に入る前に、子どもに「この中に、遠い日本からのお客様がいるが、どの人かわかりますか？」とたずねた。子ども達が、一齐に私達の方を指差した。先生は、「なぜわかったか？」と子どもにもたずねた。「髪と目が黒いから」と子ども達は、口々に答えた。

紹介の後、「何か日本の歌を歌って下さい。」と言われたので、私達は、ニーナとトビアスも加わって五人で、「籠目籠目」を、手をつなぎ輪になって巡りながら歌った。「日本語は、すべて忘れた」と昨日、恥ずかしそう

に言っていたニーナも、完全に思い出して歌っていた。

「……後の正面だーれ！」と終わると、子ども達が「ブラボー！」と叫んで拍手が起こり、打ち解けた和やかな雰囲気になっていた。

「ドイツの籠目籠目」

これと逆の、似たようなことが少し前にあり、娘達は、それを「ドイツの籠目籠目」と名付けていた。

娘達が、今度の滞独中、初めてマールブルクのキンダーシュピールへ行つた五月二十二日のことである。娘達は、帰宅するなり「お母さん、お迎え、もう少し遅く来て！」と、私に頼むのです。不思議に思つて訳をきくと「先生が、帰る前に、ドイツの籠目籠目をやって下さるので、楽しくて楽しくて！ 迎えが早いと、途中で止めねばならないので、つまらないから。早く幼稚園のある明日にならないかなあ！」と答えた。

娘達は、おやつを持ち、七分程の、桜やリラの並木道を通園していた。私は、四年前に通つた経験のある姉は大丈夫としても、妹のことは内心不安だった。この言葉

に一安心した。言語はわからなくても、ドイツの子どもと一日で仲良くなれたことに感動した私は、これ程、娘達を魅了する遊びは、どんな遊びかたずねてみた。“Zeit her eure Füßchen”と輪になって歌いながら、足と靴を見せ合ってから、洗濯をする手順に、洗う、絞る、干す、アイロンがけと、身振り動作を付けて巡る遊びらしい。初めての異国の幼稚園での、輪になり歌いながら巡る遊びは、娘達の幼年期の瑞々しく嫋やかな時間の中に、原体験として確実に像を結んだようである。このドイツの童歌は、娘達の一番好きな歌となっている。



その後、運動会が近くあるということで、子ども達は、御幣おまげのような物を持った主任の先生と、練習を始めた。その間、園の中を案内して貰い、おやつの時間となった。ドイツでは朝が早いので、おやつを持たせる。子ども達は芝生の長椅子に並んでかけ、サンドイッチ、ヨーグルト、クッキー、果物等を食べている。終わるとそれぞれ庭に散り、シーソー等で遊び始める。私も、職



▲ 教室で

員室でコーヒーと菓子パンを頂いて、姉のKは園に残し、降園までの時間を、シュミット夫人と、徒歩で旧市街に出かけた。

中世を思わせるような城門をくぐると、マルクト広場ブルンネンになっており、泉があった。ドイツは、地方分権が続いているよさである。どんな街や村でも、それぞれの顔



▲ 園庭でおやつ

を持って旅人を迎えてくれる。ライトハウス（市庁舎）は、南ドイツらしく壁に絵がかかれ、窓枠が白く塗られた窓には、桃色と白のセラニウムが置かれていた。



▲ 桜んぼが、たわわに熟れている園庭で

マルクトでシュミット夫人の友人と出会い、彼女のワゴン車に乗せてもらって園へ迎えに行く。この車は、一人の子どもを迎えるには大きすぎると思っている、シュミット夫人が、「この方は、家庭崩壊等で、両親と一緒に生活することができなくなった子どもの世話をする国営の寮の人である」と説明してくれた。先程、園を見学した際には、全く気分がなかったが、この一見平穩そうに見える田舎の、グレッツヒェンベルク幼稚園にも、離婚、年齢の早過ぎる結婚等が原因で、家庭崩壊している園児が五人もいるという。彼女は、その五人を迎えに行く途中ということだった。

十二時少し過ぎに幼稚園に着き、シュミット夫人が、幼稚園の先生に日本語を教え始めているというので、「ニーナ姉妹の通っていた松本の幼稚園で、再びお会いしましょう。」と挨拶して園を去った。

シュミット家でジャガイモ料理の昼食を頂き、沢山の桜んぼをお土産に皆とお別れした。バス停まで皆で送っ

て下さった。十三時五十五分のバスでニュールンベルクへ向かった。山道の両筋には、初夏の爽やかな風に桜んぼがひとときわつややかに煌いて揺れていた。ニュールンベルクのマルクト広場に面する店で、この地方で、十五世紀の昔から森の民の手仕事によって作られている、木彫りの聖歌隊の人形と、人形の家用の白地に花模様のニュールンベルク焼きの陶器のミニチュア、ティーセットを買い、ヴィルツブルク行きインラインタイのICに乗った。

(松本市在住)

(註)

カール・ティーネマン『一年と一日——絵と格言の
カレンダー』シュライバー&シル、一八四七年、(ベ
ルリン・コレクション ほんぷ出版)